

科学基礎論学会 2011 年度秋の研究例会

ワークショップ

夢、時間、自己同一性の哲学

司会・進行：水本正晴（北見工業大学）

提題者 1：渡辺恒夫（東邦大学）

提題者 2：三浦俊彦（和洋女子大学）

提題者 3：加地大介（埼玉大学）

現実とは何か、認識は可能か、といった問題とともに、夢は哲学で古くから語られてきた。だが夢は、単なる想像や思考実験と違い、それ自身が何らかの哲学的主張に対する証拠をも提供するように思われる。例えば最近のクリストファー・ノーラン監督による映画『インセプション』（2010）の中では、登場人物が他人の夢の中に入り込み、夢の世界を操作しようとする（それ自体は目新しい設定ではない）が、そこでは夢は何重もの階層構造を持ち、より深い階層においては時間の進み方が遅く（早く？）になっている。この映画はあくまでフィクションであるが、実際、夢の中で夢を見ていた、夢の中で何日も経ったはずなのに目を覚ますと数分しか経っていなかった、あるいは夢の中では自分ではない誰かであった、という経験が誰しもあるだろう。こうした事実は、時間や自己についての哲学的考察にとって、可能性や限界についての具体的なデータを提供しているように思われる。もしそうならば、それはどのような証拠となるのであろうか。

夢において特徴的なのは、何よりも、普通は信じられないようなことを平気で信じている、という事実であろう。そこでは、具体的に我々の合理性のどの部分が損なわれているのか、という興味深い問題（妄想 delusion の問題との関りなど）もあるが、同時に夢の中における「私」や「今」というものが、普段不可謬のように考えられていることについての反例を提供するようにも思われる。夢の中の「私」は、夢を見ている私のことを意味しているのか、夢の中の「今」は、その夢を見ている時刻（例えば朝の 5 時）を意味しているのか、といった問題に加え、両者には、統一的な意味論が与えられるべきなのか、といった問題もあるだろう。

例えば、夢の中の私と今が、現実とかけ離れているとき、その中における「私」や「今」は、私やその時刻を指していると言えるのだろうか。

夢の中の	「私」		
「今」	現実の	私	それ以外
	今	A	B
	それ以外	C	D

A、B、C、Dそれぞれが可能であるように思われるが、「私」や「今」に二つの内包を認める2次元主義のような考えを認めるならば、AとDは両立するかもしれない。他方、BとCは、それぞれ整合的な立場であるかどうか、という疑問も生じ得る。

ここで問題となっているのは、「目覚める」ということは、それまで見ていた夢の内容が「偽」であるということ認識することなのか、夢の中の「私」と「今」は、指示の点で何か決定的な違いがあるのか、例えば「今」についてはほとんどすべての夢は「間違っている」が、「私」についてはたとえ夢の中であっても常に「正しく」私のことを指しているのか、といったことである。

いずれにしても、こうした考察は、(脳科学的、進化論的観点とは別に) 夢に内在的に、哲学的に興味深い問題の存在を示す。本ワークショップは、こうした問題意識を足がかりに、夢、時間、自己同一性のそれぞれトピックの専門家の議論から出発し、これらのトピックの間の内的な関係について考察・議論することで、それぞれのトピックに対し新たな哲学的考察の材料および(願わくは)新たな洞察を与え、より深い次元から考察する契機を見出すことを目指す。(本企画は当初「インセプションの哲学」として始まったが、それはあくまできっかけにすぎず、それぞれの提題者の考察の深まりの結果、必ずしもこの映画と関るものではなくなっていることをあらかじめお断りしておきたい。)